AG5だより

日本人学校・補習授業校を応援します！

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業（https://ag-5.jp）

補習授業校の先生方を対象としたオンライン初任者研修(1)

ＡＧ５運営指導委員・東京都立大学教授　岡村郁子

ＡＧ５プロジェクトでは、2020年6月から2021年3月にかけて、オンライン会議システムを使った計５回の初任者研修を開催しています。ＡＧ５初の試みとなるこの研修に、世界中から各回60名にのぼる先生方がご参加くださり、現在、３回までが終了いたしました。対象は原則として経験３年未満の先生方ですが、それぞれの学校で初任者研修にあたられる管理職の方々をはじめ、ベテランの皆様にもご参加いただき、好評を博しています。

今月号では、現在までに終了している第１回～３回について、その内容と成果を抜粋してご報告いたします。

【研修の目的】

（1）補習授業校の概要やその教育の特質を知る

（2）授業を計画、実施、評価、改善する基本を習得する

（3）様々な子どもたちがともに学ぶための指導・支援の基本を習得する

【研修内容と日程】

第一回　二〇二〇年六月二日（火）
「補習授業校とは」佐々信行・岡村郁子（ＡＧ５運営指導委員）

第二回　二〇二〇年七月八日（水）
「授業づくり ～学習計画の立て方、教材研究、評価」佐々木常広（ダラス補習授業校副校長）、渋谷真樹（ＡＧ５運営指導委員）

第三回　二〇二〇年九月三日（木）
「授業実践～教え方の工夫」佐藤恵美（ダラス補習授業校 ＡＧ５コーディネーター）、雨宮真一（ＡＧ５研究員）

第四回　二〇二〇年十二月七日（月）
「すべての子どもたちの日本語力向上を目指して」近田由紀子（ＡＧ５運営指導委員）、今澤悌（ＡＧ５研究員）

第五回　二〇二一年三月二日（火）
「フリーディスカッション」全員

第一回「補習授業校とは」

初回では、ＡＧ５補習授業校チームのリーダーである佐々委員が本研修の目的と概要について説明するとともに、岡村が補習授業校の子どもたちの持つ特徴についてお話ししました。二〇一八年七月号でお伝えしたとおり、北米の補習授業校を対象とした調査では、現在、半数以上が永住予定または日本へ帰国するかどうかわからないと答えており、英語が第一言語となっている子どもが四割を超えています。在籍児童生徒も多様化の一途をたどり、補習授業校に対するニーズも多岐にわたります。こうした多様性を排除せずに包摂し、二言語・二文化を積極的に活用すること、「グローバル人材育成」という従来の考え方から一歩踏み出して、「トランスナショナルな生き方の支援」を行うこと、「足りないものを補う」だけの場ではなく「グローバル社会のフロンティア」としての役割を担うことが、これからの補習授業校の在り方といえるでしょう。なお本調査結果の詳細は、こちらのＵＲＬよりアクセスして、ＡＧ５ホームページからご覧いただけます。

第二回「授業づくり～学習計画の立て方、教材研究、評価」

ダラス補習授業校の佐々木副校長先生からは、今般の学習指導要領の改訂の方向性をふまえて、「アクティブラーニング」と「カリキュラムマネジメント」の二つのキーワードにそってお話しいただきました。

また、年間指導計画の立て方や板書例、ワークシート等の各種資料にアクセスできるインターネットサイトについても紹介がありました。

①文部科学省のCLARINET

「施策の概要」／「（3）在外教育施設の教育水準の向上」／「③教員の研修」の中に「ウ．補習授業校教師のためのワンポイントアドバイス集」があります。ここには年間指導計画作成にあたっての具体例や学年別の指導資料集のリンクもあり、単元ごとの学習の流れや、各種ワークシートもダウンロードすることができます。

②補習授業校派遣教師校長協議会による「補習授業校用の国語と算数の年間計画」

中部テネシー日本語補習校の後藤誠司校長先生より、ＡＧ５のホームページ上の「発表ブース」に二〇二〇年度から使える年間計画案をご提供いただいています。低学年の国語については年間八十時間分のものと一二〇時間分のものが用意されており、各学校の実態に合わせて利用す

ることができます。

③「楽しく日本語を伸ばす補習授業校学習活動計画集」

ＡＧ５補習授業校チームがダラス補習授業校と協力して実施した授業の学習活動計画を冊子にまとめ、二〇二〇年四月に発刊したものです。単元別に「目標」と「学習課題と活動」が示されており、ダラス補習授業校における実際の活動を見ていただくことができます。この資料もＡＧ５のホームページからダウンロードが可能ですので、ぜひ参考になさってください。

以上のような手軽にアクセスできる教材は、準備にあまり時間の取れない補習授業校の先生方には心強いものになるでしょう。

続いて渋谷委員からは、教師に求められる力量や、授業の計画・実施・評価・改善というサイクルを理解して学習計画の概略をつくることができるようになることを目標として、次のような講義がありました。

初任者の先生方には、保護者の立場から急に先生になったり、平日はお仕事をしたり、大学院の学生をやったりしながら週末だけ補習授業校へ来ることになったという方も多いでしょう。まずは「自分ができること」と「教えること」は違う、ということを念頭におくことが大切になります。よい教師は、「わからないこと」がわかる人であり、教師には以下の三つの力が必要となります。

①「教える内容を理解する力」＝なぜそうなるのか、教える前に自分自身で理解すること。

②「子どもを理解する力」＝子どもの発達段階と、現地校や家庭で何をどう学んでいるのかを理解すること。

③「教える技術」＝子どもが目を輝かせる授業のための技の習得。

ただ教科書の内容を追うのが授業ではありません。教科書を使って子どもにどんな力をつけさせたいのかをよく考えながら準備してください。

第三回　「授業実践～教え方の工夫」

ＡＧ５の雨宮委員より「教える技術」について、姿勢、計画、技術について、次のお話がありました。

①「姿勢」：子どもの成長支援　ほめ方の心構え

スタートとゴールの両方から、子どもを支援することが必要です。スタートでは「こんなことができるようになったね」「すごいね」という言葉がけで送り出し、ゴールでは「よくできました」「頑張ったね」という言葉で迎えてあげたいものです。

②「計画」：子どもの成長イメージ

どんな子どもを育てたいかイメージしましょう。卒業時・学年末進級時・単元終了時にそれぞれどのようなことができていてほしいかを具体的に考えれば、そこに向けて各時の「授業の目当て」を明確にできます。「書く」「聞く」「話す」「読む」の分野別に、具体的な学年ごとの目当てを定めて計画するとよいでしょう。

③「技術」：子どもの学習環境

〈教室コントロール〉

子どもの「体の動き」をコントロールするために、以下のような教室でのルールを工夫してつくり、了解事項にしておきましょう。

・指示は一度に一つ・先生と子どもは同時には話さない・活動を終えたら「座る」、「本を閉じる」、「先生を見る」・同意見の場合はチョキで挙手。

子どもたちの「頭の動き」を上手にコントロールするために、以下のようなことも心がけてみましょう。

・子どもの頭の中身をイメージする・活動中に別の指示を出さない、なるべく話しかけない・身近な質問から高度な質問へ・重要なポイントは繰り返し尋ねて確認する。体を動かさないで済む授業、何も考えないで済むような授業はしないように工夫をしてください。

〈授業の展開リズム〉

一つの活動は集中を持続させるために十・十五分間と設定し、できるようであれば時間を徐々に伸ばします。聞く・話す・読む・書くなどの各時間の配分にも注意します。また、どの子どももどこかで活躍できるように配慮することも重要です。毎回の授業で五～十分程度の短時間、継続的に行う「帯活動」を設定することも考えてみましょう。短時間でも、長期間繰り返して定着させることが大切です。授業にメリハリがつき、家庭学習の動機づけにもなります。

続いてダラス補習授業校の佐藤先生はホワイトボードの前に立ち、実際の授業中継さながらのパフォーマンスを交えて、小六国語の各単元を例として話してくださいました。

①授業への導入＝クラスに「学びの雰囲気」をつくる

佐藤先生から参加者へＺＯＯＭ越しに「視線のビーム！」が送られ、参加者の集中をぱっと集めて授業が始まりました。手に持っていた紙を開くと「広げる」の文字。ホワイトボードに貼って、皆で声をそろえて読みます。次に取り出した傘をぱっと広げて、手元のノートに「（かさ）

を広げる」と書かせます。このあと、全員が（　）に思い思いの文字を入れて文をつくり、できた人から起立、順に発表して着席します。この数分の導入部分だけでも、子どもたちが集中を高め、見る・聞く・書く・話す、そして立つ・座る、さまざまな活動ができていることがわかります。

板書された単元名と「めあて」を各自がノートに書き、全員で読み上げることで、本時のゴールに向けて何を勉強するのかを子どもたちに自覚させます。次に、「読書の世界を広げる」とはどういうことか、二分間各自で考えてノートに書きます。ここで導入からの「広げる」のイメージが役立ちます。こうしてさまざまな活動を交えての短い導入を行うことで、クラスに学びの雰囲気ができ、授業がぐっと進めやすくなります。

②板書の工夫：事前に用意した紙やマグネットの活用

佐藤先生は、子ども一人一人の名前を書いたマグネットをつくってホワイトボードに貼っておき、さまざまな場面で活用しています。紀行文『森へ』の単元では、本文中の八つの写真のうち好きなものを一つ選び、各自のマグネットを番号のところに貼りつけました（写真1）。これで子どもたちが自分の意見を表明し、視覚でとらえることができます。事前に用意した絵や紙も活用し、情報を見やすく整理して視覚化することで、子どもたちの理解を助けています。

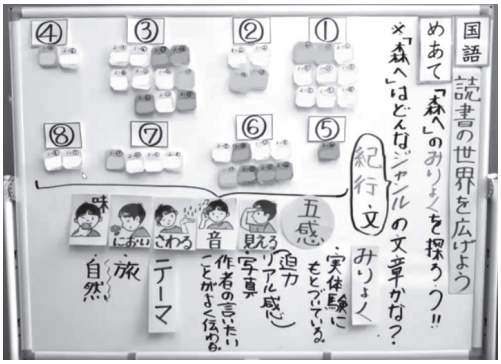

写真1

③授業内での音読の工夫

「たけのこ音読」は、子どもたちが好きな行を選んで、順番が来た時にぱっと立ってそこを読む方法です。「なりきり音読」は、おじいさんや宇宙人などのキャラクターになりきって読むやり方で、雰囲気がよどんだりした時に使うと、子どもたちが活性化し、音読が苦手な子どもにも好評とのことです。「つながり音読」では、みんなの顔が見えるように輪になって座り、各自が好きな行を選んで一行ずつ読み進めます。誰もいなかった行は全員が読むと決めておくと「困ったときにはみんなで助け合うという気持ちも生まれる」という思わぬ効果もあるとのことでした。

④読解教材：それぞれの教材文の特徴を生かして読む

◎物語文では、登場人物の心情バロメーターを数字で表現、セリフから人物像に迫る

物語文では、登場人物の行動から見える心情の変化を「友情メーター」や「愛情メーター」に数字で表してみます。『帰り道』の単元では、主人公のセリフから人物像に迫ったり、探偵になって物語中の「事件」を追ったり等、工夫して物語を楽しんで読み進める様子が紹介されました。

◎古典のような難しい教材文でも、初発の感想を大切に

六年生の教科書になると『天地の文』のような難しい教材も出てきます。まずは音読し、「すごい！　感動」「……ため息」「おもしろい！」「なるほど！」の四つの初発の感想を板書してみます（写真2）。率直な感想を出し合うことで、面白さに気づき、書かれている重要な内容にも十分にアプローチすることができます。

◎説明文は「謎解き」「探検隊」

難しくなりがちな説明文でも、誰にでもできる「キーワードを数える」作業から何を中心に述べているのかを理解し、筆者の主張に近づくことができます。初めの「主張」と終わりの「主張」の中間部に「事例」があることを、折り紙を観音開きにして理解させたり、段落ごとの接続詞によって文章の関係性を図に表したり、視覚的に情報を整理することで、子どもたちの理解を助けています。

週一回の補習授業校でも、工夫と事前準備と子どもたちとの向き合い方でここまでの授業ができることを示していただき、参加者にとっても良い目標となったことと思います。

次回の「すべての子どもたちの日本語力向上を目指して」の様子についても五月号にてご報告いたします。どうぞお楽しみになさってください。

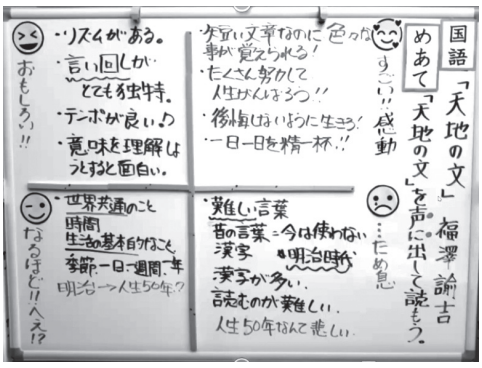

写真2